



東京の荒川に凄腕の整体師がいるらしい。名前は、加藤アミ。

ぼくの友人Oはあこがれの女性の名前でもいうように、その整体師のことを加藤センセといった。

友人Oは、加藤センセ、とつぶやくたびに、りんご病の少年のような顔になる。加藤センセは年齢不詳だが、かわいらしい女性だという。だが、友人Oが加藤センセのことを、ぼくに夢中になって喋ったのは、彼女がかわいいからではない。

もともと友人Oは、現実の女性には興味をもたない。友人Oの恋人は、ぬいぐるみなのだ。それも人間ではなく、ねずみのぬいぐるみである。

友人Oの職業はプログラマだ。その世界では「神のO」と呼ばれているらしい。それで、都内のマンションの部屋に一人こもって、何日も外にでなくても、たくさんの金がOの銀行口座には入金されている。

だから、友人Oは、お金持ちなのである。けれど、Oにとっては女も金にも興味がないらしく、コンピューターとねずみのぬいぐるみがあれば、人間は必要がないそう。唯一ぼくがOから友人と認識されているのも、ひとつの事件があったからで、その事件がなかったら、ぼくの存在とOを結びつけるものなど、皆無だったろう。

ぼくがOと知り合ったのは、ぼくが彼のぬいぐるみの巨大なねずみを救ったからである。何年前の、春の夕方だった。Oは巨大なぬいぐるみを「散歩につれていく」つもりで、抱きながら歩いていたそうだ。歩道橋の上には、ヤンキー中学生がいて、中学生は、ひさしぶりに外にでたOの、ひよろひよろな肉体と、その腕に抱えられた巨大なねずみのぬいぐるみにイライラしたのかもしれない。突然、Oからぬいぐるみを奪って、それを歩道橋下の道路に投げたのだ。

ぼくは、その時間に歩道橋の下を車で走っていた。広告収入でギリギリ成り立っているフリーペーパーをつくっている雑誌社の雇われライターをしているぼくは、いつも走っている。どこかに取材へ行く予定や、なにかの締め切りに追われている。だからその日も、原稿を急いで入稿するべく会社に戻っている途中だったのだ。

そこに、巨大なぬいぐるみが落ちてきた。ぼくは、小学生くらいの子供があやまって歩道橋の欄干から落ちたのだと誤解した。目の前におちてきたのは、ぬいぐるみではなく、子供だと思ったのだ。だから車がぶつからないよう、ハンドルを全力でまわして、ひとまず自分の車をガードレールにぶつけた。

「なんだ、ぬいぐるみじゃないか」

上から落ちてきたのが、人間ではなくて、フワフワのぬいぐるみだと気づいたぼくは、安堵とショックにサンドイッチされて、呆然としていた。そこにやってきたのが、真っ青になったOなのだ。

「ありがとう。俺は……あんたに一生恩義をかんじるよ……俺のチュー子を、すくってくれて……ほんとうに……感謝する！」

Oは、泣いていた。

なすびのように青白く、おびえた表情で、涙をながしているO。彼との付き合いはその日からはじまったのだが、いまだにぼくはOの名前をしらない。

「名前なんて、記号みたいなものだから。それならいっそ、記号のほうがいい」

とどのつまり、Oとはこんなヘンクツ男なのである。その彼が、荒川の加藤センセとつぶやくときだけ、りんご病の少年のように、Oのやせて青白い頬を真っ赤にパンパンに膨らませる。荒川の

加藤センセ、一体、どんな整体師なのかぼくが気になるのも当然だといえよう。

気になった対象をみつければ、すぐにアポをとり、どこまでも追いかける、それが――ミニコミ誌のライターとはいえども――ジャーナリストの精神というものである。プログラマとして「神のO」とよばれる（らしい）変人の友だちOを、真っ赤な顔で「加藤センセ」と呼ばせる、荒川の整体師・加藤アミとは、どんな女性なのか。

本当なら、加藤センセの話をきいたその晩にでも、都電荒川線にのりこみ、「加藤整体」を目指したいところだった。けれども、ぼくはOが「加藤センセ……がマッサージしている店があるんだ」とはじめて話した日も、それから数週間たっても、加藤整体に足を運んだことはない。

それは、「加藤センセ」と顔を赤らめるOにたいする遠慮でもある。友だちの女には手をださない――べつにOは加藤センセに惚れているわけではないと思うのだが、それほどOにとって魅力的な女性整体師の店をぼくが行く必要もないだろうと思ったのである。

ところが、Oと顔をあわせるたびに彼が言うのだ。

「おまえ、まだ加藤センセの魔法の手技をうけていないのか」だったり、「人生がひっくりかえる」だったり。

一体、加藤センセこと、整体師・加藤アミのなにがそんなに魔法なのか。どう人生がひっくりかえるのか。ぼくは、Oと焼肉屋で肉を焼きながら、加藤センセの「技」について聴きだそうとするのだが、Oは、くわしい内容を教えてくれないのだ。ただ「加藤センセ……加藤センセ……」「人生がかわる」「魔法だ」の繰り返しを聞かされるだけなのだ。

今日、Oと会う。ぼくらは、いつもだいたい月末になると、焼肉屋へいく。そしてそこでビールを飲み、肉をたべまくる。Oは金持ちだが、実際に稼いだ金は、彼だけが知る「プロジェクト」へ投資しているらしく、食費にあてる金額は、売れないライターである自分と同じレベルであるらしい。

そういうわけで、月に一度焼肉を食べるくらいが、ぼくらの財布にはちょうどよく、また、Oも月に一度くらいは、閉じこもった部屋から出るのがいいいらしかった。ただ、今日は、Oが昼にメールをおくってきた。

「もう、俺は肉は食わない」

え？ ぼくはすぐに返信メールをうった。

「どういうことだ？」

「肉を食うと、俺のなかの悪が強まるんだ。牛も豚も……哺乳類は俺たちの仲間じゃないか。おなじ哺乳類じゃないか」

え？

Oは、人間を人間扱いしない男だった。名前を記号と同一視して、自分の名前を明かさないうような男だった。好物は血のしたたる生レバーだったはずだ。それがどうしてこんなメールを送ってくるのか。

「俺の名前は、岡田三郎だ」

え？

岡田？ 三郎？ Oが突然本名のメールを送ってきた。

ぼくは、携帯電話のメール画面をしばらくのあいだ、みつめていた。あのOが、哺乳類を食べないと言い出し、この数年間、Oと名乗っていたのに、とつぜん本名を教えてきた。この変化はどういうことを意味するのだろうか。

「焼き鳥なら……どうだ……鳥は……鳥類だろ。岡田くん」

ぼくは思わず、メールではなく、〇―岡田三郎くん―に電話をかけて、彼が着信すると同時に話しかけた。

「鳥か……鳥類なら……いいだろう。なんでも嫌うわけにはいかないしな。よし、今日は焼き鳥をくおう」

ぼくは電話を切った。

渋谷で午後7時に待ち合わせをしていた。ぼくは昔から、いつも5分遅刻をしてしまう。そして、そういうときはたいてい〇——岡田三郎くん——は、眉間に深いシワを寄せて、まるでぼくのことを昆虫であるかのような視線で眺めてきたものだった。

その晩、ぼくはまたしても5分遅れて渋谷に到着してしまった。その是非はともかく、岡田三郎くんはさぞかし怒っているだろう——と、おそろおそろ忠犬ハチ公のあたりへ行ってみると... ..なんと、〇がああ巨大なぬいぐるみを抱いて、ニコニコと笑っているのである！

ぼくは、ひょっとしたら夢のなかにいるのかもしれない、と自分の頭を点検せざるをえなかった。この数年間、いっしょに牛の生レバーを食べていた友人が、とつぜんの「哺乳類たべない宣言」をだしたり、まるでスパイのように自分自身を〇としか名乗らなかったのが、とつぜん「本名は岡田三郎宣言」をだしたりした。それだけならまだしも、あの歩道橋ぬいぐるみ落下事件以降、一度も外にぬいぐるみを持ち出さなかった〇が、渋谷のハチ公前に、ぬいぐるみをもってきている。

5分待ち合わせに遅れると、眉を寄せているはずの〇が.....なんと、女連れなのだ！

「〇.....いや、岡田くん.....」

「遅いじゃないかあ」

「なんだか、いろんなことが変わった気がするんだけど.....」

「そうかな。紹介するよ、このかわいい女の子は.....」

〇.....岡田くん.....は、ぬいぐるみを抱いたまま、ぼくに「このかわいい女の子は.....」と紹介をはじめたので、ぼくはやっと理解した。この渋谷系なファッションの女性が、あの加藤アミ先生なんだろうか？ ちがうな.....では、誰だ？

「このかわいい女の子は.....えーと、君、名前なんだっけ」

「あたし？ リサでいいよ」

「俺はサブローで」

「この人は？」

「あ、彼は田村くん。すごくいい奴なんだ。俺のチュー子の命の恩人なんだ」

「チュー子？ この子、チュー子っていうんだあ」

ぼくの目の前で、二人は話をはじめた。ぼくの頭はこれまでの人生のなかで、かつてない混乱



の真っ只中にあった。すべての歯車がかみあっていなかった。だけど、ひとつ確信したことがある。〇——岡田三郎くん——は、なんだか、前向きな男になっていた。もともと、〇という人間自身は、背も高いし、友人として付き合ってみればぬいぐるみを愛するやさしい男である。

けれども、〇の人生になにがあったのか、彼は愛するぬいぐるみチュー子以外には、心を閉じて、自分の名前も名乗らず、一ヶ月のうち28日は部屋からでてこなかった。いつも下をむいて、人と話すときは視線を必ずそらして、ひたすら牛肉の生レバーをビールで飲み干すことに快楽を覚えるような人生になっていたのだ。

その岡田くんが変わったのは……加藤センセ。彼女の出現以降である。

ぼくは、岡田くんと、たまたまハチ公前で、ぬいぐるみがかわいいと岡田くんに話しかけていたりサちゃんと、その三人で結局焼き鳥屋ではなく、渋谷のカフェへ行って珈琲を飲んだ。珈琲を飲んでいると、リサちゃんは、

「あたし、ヨガスタジオの会員なの。いま、2枚フリーパス券をもってるんだけど、あなたたちのどっちか、いまからあたしとヨガいかない？」

と言った。ぬいぐるみを抱えた岡田くんは「ヨガ……興味あるなあ」とほがらかに言った。

……というわけで、ぼくは岡田くんとリサちゃんを見送って、渋谷のカフェで珈琲を飲んでいるのである。岡田くんのたった一人の友人としては、この変化は乾杯したい。けれども、ぼくのジャーナリストとしての好奇心が、爆発寸前である。

「加藤アミとは、何者なんだ？」

ぼくは、ひさしぶりに外で、独り言をつぶやいていた。マッサージだけで、人間がこんなにかわるものなんだろうか。何が、あったんだろうか。

ぼくは、来週の日曜日に、整体師・加藤アミのいる荒川へ行ってみようと思っている。

(了)